

私たちの  
シュウカツ

安城特別  
支援学校の1年

新型コロナウイルス感染症拡大に伴う規制が緩和され、安城市の安城特別支援学校は二十五日から再開した。五月はいつもなら、企業への就職を目指す生徒たちが六月の企業での実習に向け、最後の調整に臨む時。指導の遅れを少しでも取り戻そうと、再開前の十九、二十一日には個別懇談があった。(四方さつき)

5月・実習に向けて

「これが、景気が良かった昨年度の進路実績です」。高等部三年生の教室。進路指導主事の説田智洋教諭が企業に十六人が就職したデータを示し、生徒と保護者に説明する。説田教諭は「新型コロナウイルス感染症の影響で先が分からない。採用活動は相当厳しくなるとみています」と表情を引き締めた。

「十分な指導ができないまま企業の実習に送り出すのは、練習なしで試合に挑むようなもの」。特別支援学校では、三年次の産業現場実習が実質的な採用試験を兼ねる。就職を希望する二十人中、実習の日程が正式決定したのは、今のところ六人。三月にはほぼ全員の実習先の当てがあった



① 進路の説明を聞く加藤さん  
② 林教諭からの説明を聞く鈴木さん  
③ 担任との面談で休校中の様子を話す佐藤さん(奥右)



④ いずれも安城市の安城特別支援学校で



が、コロナ禍が直撃した。学校側は実習日程が決まった生徒を中心に、学校再開前に個別面談することを決めた。担任とともに説田教諭が進路状況を説明。実習での注意事項や今後の見通しなどを伝え、生徒たちの気持ちを聞き取った。

七月に二週間、二年生の時と同じ設備会社で実習する加藤敏枝さん(も)の母、代さん(五)は「前回、とても温かく対応してもらった会社。就職に結び付けば」と願う。清掃の仕事に取り組む敏枝さんは「ブラインドカーテンは水でぬらした

軍手を使って拭くので難しくなかった。サボらずに頑張ると張り切っていた。説田教諭は「分からないことは『分かりません』と言えよ。」「あいさつや返事は明るく大きな声で。」「学校で勉強してきたことが発揮できるように大丈夫」と励ました。

調整が進む。休校と外出自粛が続いた影響で、「生活リズムが乱れていないか、体力は落ちていないか」と心配している。と啓太さんの担任の林正記教諭。「休み中はどう過ごしていた?」「体調管理もばっちりかな」と声を掛け、いつも以上に気を配った。

向きが変わった」と説田教諭。断られる一方だった実習受け入れ先の開拓が少し進み始めたという。二年次の実習で自ら頑張ったおかげで生徒たちをたまたま、ようやく通常の学校生活が戻る。「スタートが遅れた影響を最小限にとどめたい」と教員ら。就職に向けた、最後の一年。夢をかかなえるため、奮闘の日々が続く。

企業開拓逆風の中に光

◇ 次回は六月。ようやく始まった作業実習で、木工や陶芸、刺しゅうなどに取り組む生徒たちの様子を取材します。